

目次

まえがき……………3

第一 短歌編

1 昭和五十四年度の分……………7
3 昭和五十六年度の分……………9
2 昭和五十五年度の分……………8

第二 俳句編

1 昭和五十四年度の分……………41
3 昭和五十六年度の分……………47
2 昭和五十五年度の分……………42
4 昭和五十七年度の分……………75

第三 漢字詩編

1 昭和五十五年度の分……………82
3 昭和五十七年度の分……………110
2 昭和五十六年度の分……………87

著者の略年譜……………115

主要な編著書……………117

幼き日ともに遊びし友垣よ健やかなりや八十路（やそぢ）ま近く

朝寒の小路を行けば土色のカマキリ一つジッと動かず

昭和五十六年十一月七日

うそ寒き日なれど心樂しかり通して見たる菅原伝授

桜丸梅王松王それぐにおのが道行くそれがたのしき

惜しみつゝ桜は花を愛するもの千鳥が淵の春を待ちつゝ

武蔵野の堀かねの井を草分けて見し思ひ出も遠くなりけり

カタコトと定齋屋の音の行き過ぎし本郷の通りに初夏の風

秋高く向ひに見ゆる佐渡が島いまも目にあり六十（むそ）とせ昔

何事のこともしなしたゞいねて何なさむかと思ひつゝ居り

両国の末広という鳥屋にて時枝・風巻両君の送別会

新潟に水上屋のおたえさんといふ芸妓が居たりと信綱博士